

【書評】

伊藤直之編著『地理歴史授業の国際協働開発と教師への普及
－資質・能力の多様性と学際性を視点として－』

(風間書房, 2022年刊, 234頁) 4,000円+税

中本和彦
(龍谷大学)

本書は、2017年度に採択された科学研究費補助金(基盤研究B)研究課題「資質・能力の多様性と学際性を視点にした地理歴史授業の国際協働開発と教師への普及」(研究代表者:伊藤直之)の3カ年に及ぶ研究成果について、令和3(2021)年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)の交付を受けて公刊されたものである。

2017年に小・中学校、2018年に高等学校の学習指導要領が改訂され、これまでの学習内容を重視した学びから、資質・能力を重視した学びへと転換された。しかしながら、地理歴史教育における資質・能力は、育成する資質・能力を、個別の教科によらず、通教科的で汎用性の高い資質・能力と捉えようとする立場、それとは対照的に、個別の教科の固有性に立脚して地理や歴史ならではの知識に由来する資質・能力を主張する立場、あるいは公民、経済、地理、歴史の各科目が各々の領域を超えた社会科として学際的な資質・能力を主張する立場など、その捉え方は多様である。それは、ともすると、研究者、授業者の教科観やよって立つ親学問の違いによって、対立や分断を生み出す。地理学・歴史学の学問としての個性や特性を際立たせようとするか、それとも越境の学問としての学際的な性格を色濃く表すか、育成しようとする資質・能力の汎用性の度合いや教育内容の枠組みなどに影響を与える。

そのような分断・対立を乗り越え、これらの両立・調和を創造しようと、国内外の教科教育学研究者、地理学・歴史学研究者、学校教師らの協働によってなされた研究の成果を表したのが本書である。章立ては、以下のように構成されている。

第一部 地理歴史教育と資質・能力

序章 地理歴史教育における資質・能力論

- 1章 日本の教育改革にみる資質・能力
- 第二部 多様性にもとづく資質・能力論
- 2章 地理ならではの資質・能力
- 3章 歴史ならではの資質・能力
- 第三部 学際性にもとづく資質・能力論
- 4章 汎用的な資質・能力
- 5章 歴史教育における学際的な資質・能力
- 第四部 資質能力育成授業の国際協働開発と現場への普及
- 6章 探究学習にもとづく地理授業づくり
- 7章 コンピテンシーにもとづく歴史授業づくり
- 8章 エシカル消費を促す地理授業の国際協働開発と実践
- 第五部 専門科学からみた資質・能力育成の地理歴史教育
- 9章 地理学からみた資質・能力育成の地理教育の展望
- 10章 歴史学からみた資質・能力育成の歴史教育の展望
- 終章 本研究の意義と課題

第一部では、地理歴史教育の資質・能力の最前線を論じている。序章では、研究の目的や研究方法を示す中で、先に述べたような今日の資質・能力論の現状と課題を論じ、地理歴史教育における資質・能力像を、①多様性に立脚する資質・能力像、②学際性に立脚する資質・能力像、③汎用性に立脚する資質・能力像の3類型に整理し、本研究の理論的枠組みとして示している。1章で、日本の学習指導要領における資質・能力を、教育改革のプロセスから論じ、本研究と関連付けている。

第二部では、地理学や歴史学研究に由来する資質・能力論を論じている。2章では、地理ならで

はの資質・能力論について、ドイツのコンピテンシー志向の教育スタンダードを取り上げて検討し、初等・中等教育での育成をめざす地理コンピテンシーを整理し、それらの共通性と相違点を明らかにしている。これらの検討から、日本の地理教育への示唆として、「空間 (Raum)」を初めて扱う初等の地理学習における地理コンピテンシー育成の重要性を論じている。3章では、ドイツ各州の歴史科学学習指導要領を取り上げ、各州で異なるコンピテンシーが設定されていることをもとに、各州が依拠した理論的基盤としての6つの歴史教育論を明らかにしている。ここから、日本における歴史教育固有の資質・能力の設定に向けた方策として、学習指導要領が依拠する理論的根拠を明確にすること、歴史的分野固有の目標を設定することの2つの方策の必要性を論じている。

第三部では、各教科を超えた学際性(汎用性)と、教科内における学際性から、資質・能力を論じている。4章では、フィンランドにおけるカリキュラム改革とそれを支える現象的学習(Phenomenal Learning)論を取り上げ、フィンランドのカリキュラムにみる教科横断的な枠組みや視点、現象的学習論の特質を明らかにしている。そこから、探究学習を軸とし、「社会に開かれた教育課程」を重視する日本の新学習指導要領への示唆として、現象的学習論の可能性を論じている。5章では、米国マサチューセッツ州の「歴史と社会科学フレームワーク」を取り上げ、本フレームワークが教科内の学際性、及び教科を超えた学際性を重視した構成であることを明らかにしている。そこから、本フレームワークが歴史教育における資質・能力の育成として、市民的知識の育成、リテラシー教育(言語教科)を基盤とした市民的スキルの育成、民主主義社会に参画するための実践的な市民的参加スキルと市民的性向の育成を重視していることを論じ、ここに、市民性教育として歴史教育を位置づける際の示唆を見出している。

第四部では、「資質能力育成授業の国際協働開発と現場への普及」として、6章ではイギリスの地理教科書執筆者による講演と地理教科書にもとづく授業づくりワークショップを、7章ではドイツの歴史コンピテンシーにもとづく歴史授業づくりワークショップとそれを受けた授業実践への結

実の様子を、8章では日本の教師がドイツのギムナジウムで授業を行い、その過程で授業改善を図っていくプロセスを紹介している。これらは同時に、6章では地理を事例に他教科でも通底する探究学習にもとづいたワークショップの成果を、7章では歴史ならではの資質・能力論にもとづいたワークショップの成果を、8章では地理を事例に汎用的な資質・能力の育成をめざした授業実践とその成果を示している。

第五部では、地理学・歴史学のディシプリンという観点から、資質・能力の育成のあり方について論じている。9章では、ESDをカリキュラムに反映させているドイツの地理教科書を取り上げ、2つの単元の分析を通して、それぞれの地理的見方や考え方を明らかにしている。これらから、育成される資質・能力とは、地理的な見方や考え方を習得することであり、コンピテンシーベースの学習には基礎的な知識やスキルの習得が基礎であることを論じている。10章では、「歴史的な見方・考え方」の育成を重視したドイツの歴史教科書を取り上げ、「歴史とは何か」、「歴史の主人公は誰か」という問いかけから分析し、そこにみられる歴史の特性と多様性を明らかにしている。そして日本の歴史教科書との比較を行い、歴史学からみた日本の歴史教科書への提言を行っている。

以上を主な内容とする本書の最大の意義は、流儀や作法も異なる国内外の社会科学教育学、地理学、歴史学の研究者、さらには学校教師が一堂に会して、地理歴史教育における資質・能力について、それぞれの立場から虚心坦懐に、その多様性と学際性を論じたことである。終章では、本研究の成果と課題が述べられ、その中で、「資質・能力の育成に寄与するために欠かせない本質的な知識は何か」という問いに対する回答が、残された課題として挙げられている。今後、多様な立場のものが過度な相対主義や普遍主義に陥ることなく議論を重ね、その回答の「正しさ」がつけられていくことを期待したい。資質・能力の育成が求められる今、地理歴史教育に携わるものにとって、本書は多様な資質・能力論の見取り図になる。是非一読されることとお勧めする。